

内田博士逝去

京都帝國大學教授文學博士内田銀藏氏は去七月十一日大學文學部附列館内の研究室に於て突如疾を發し、爾來療養僅かに旬日、二十日に至り全く危篤に陥り、二十二日午後八時四十分を以て長逝せられたり。病名は醫學部教授藤瀨博士執刀の下に解剖の結果胃腸腫脹と定れり。危篤の報天廳に達するや特に位一級を進めて從四位に叙し、旭日小綬章を授けられ、二十五日葬儀に際して勅使を差遣して幣帛を賜へり。葬儀は二十五日午後四時京都寺町二條日蓮宗大本山妙滿寺に於て執行、荒木京都帝國大學總長以下各部の教官卒業生其他朝野の名士東京大阪神戸より會葬するものを合せて五百餘名、大學總長、文學部長、文學部史學科教官總代、卒業生總代、學生總代、早稻田大學、神戸市長其他の弔詞あり、東京帝國大學文學部よりは黒板博士總代として燒香あり、本會に於ても桑原評議員本會代表として悼辭を靈前に獻じたり。

博士は明治二十九年東京帝國大學文科大學史學科を卒業せられ三十二年同大學の講師となり、三十五年文學博士の學位を授けられ、翌年より史學研究の爲め英佛獨三國に留學三十九年歸朝せら

る、之に前ち廣島高等師範學校教授に任じ、次で三十九年京都帝國大學文科大學教授に任ぜられたり、是れ同大學に史學科開設の爲めにして翌年專任教授となり、同年九月史學科の開講の初めより今に至るまで十有三年、専ら史學の研究と學生の指導との任に當り、同大學に於ける史學研究室の開始は實に博士の創意にして當時東京大學未だ其設けなかりしもの、其後の組織等其經營に負ふ所多かりき、本會の創立亦博士同志と共にこれを唱導し特に力を盡され、長く評議員たり。

博士は已に明治三十二年より東京大學に於て日本經濟史を講ぜしことありしが、京都大學にては、史學研究法、國史總論、日本近世史、日本經濟史に關する講義演習等あり、而して博士の潜研最も努められしは一般經濟史殊に日本經濟史にして博洽の學殖と精緻なる研究方法は方に獨歩の觀あり。著書に於ては早く「日本近世史」の編述を企て、其第一卷の刊行を見しに止りしも、其後「經濟史總論」、近頃は「近世の日本」の著ありしこと既に世の知る所なり。其他時に隨ひ研究の發表は、本會發行の史學研究会講義集、續史的研究及び本誌を始めとし、藝文、史學雜誌、哲學雜誌、經濟論叢、國家學會雜誌、國民經濟雜誌、歴史地理等の誌上に於てせられしところ、就中、「時」(藝文)「世界」(哲學雜誌)は博士の哲學的思索の一面を窺ふべく、「歴史の理論及歴史の哲學」(史學雜誌)「史學と哲學」(藝文)の如きは史學の理論に關する精透なる所論

を知るを得べし、經濟學經濟史に關しては、「經濟史の性質及其範圍に就きて」(史學雜誌)、「經濟史の研究に就きて」(經濟叢書)、「資本」(經濟論叢)、「中等階級政策」(最近社會政策)、「佛教の經濟思想」(社會政策論叢)、「貨幣の起源」(國家學會雜誌)、「日本上古の人民移住」(國民經濟雜誌)、「馬場正通の生涯及其著書」(史學研究會講演集)、「鹽鐵論に就きて」(京都法學會雜誌)等尙獨逸の雜誌に登載せられたるものに、「Wirtschaftliche Entwicklung und soziale Theorien im alten China (Archiv für die Geschichte der Sozialismus und der Arbeiterbewegung.)」及「Chen Huan-Chang: The Economic Principles of Confucius and his School」批評(全上)あり、其外博士は日本運維交通史料の編纂をなし、正編補遺併せて十三冊あり。

博士昨年歐米視察の途に上り大學制度及教育に就いて調査し本年三月歸朝後大學教育に關する數種の論文を公にし又本誌前號所載の「東航雜談」にまた博士の視察の見聞を録せしものにして歸學以來、多忙の裡に精勵特に研鑽に勉められ、又洋行前より關係せられし神戸市史の監修に於て地方史編纂上の一新機軸を出されんとしたりしに隨月にして濫焉として贊を賜へらる、享年四十八、尙ほ春秋豐かにして學界、博士の大成に俟つべきもの多かりしに天齡を假さず、洵に惜しみても尙ほ餘りある所なり。

箕作博士の訃

本會々員東京帝國大學文學部教授文學博士箕作元八氏は去る七月六日腸溢血を發し、爾後靜養中八月二日病頓に革まり、八日午後九時二十分遂に永眠せらる。内田博士逝かれて僅に二旬茲に訃報に接す、洵に史界の恨事相踵く、悼惜に堪へざる所なり。

博士は箕作秋坪氏の四男、明治十八年理科大學の業を卒へ、翌年獨逸に留學し専ら動物學を究められしが、半途眼疾の爲史學に轉じ、當代の碩學大家に親炙して研鑽歳を積み二十五年歸朝せらる。爾來東京高等師範學校並に第一高等學校に教授たり。三十三年更に文部省より佛蘭西留學を命ぜられ、親しく彼地の史料を採り史蹟を訪ひ富饒なる學殖を齎して三十五年歸朝せらるゝや、直ちに文科大學教授に任ぜられ、翌年論文を提出して文學博士の學位を受け、以て今日に及べり。

博士は云ふ迄もなく西洋史學一般に對する造詣頗る深く其一端は「西洋史講話」の大著に窺知し得る所なるが、就中佛大革命史及ナポレオン時代史に至りては定に博士が得意の壇場とも稱すべく其精緻を極めし研究は確に學界獨歩の觀ありとすべし。海軍殊に海戰史に於ても博士は蘊蓄深く獨創の見解を懷かれ、文科大學海軍大學の講述を外にして屢々其所説を公表せられたり。歴史教育の方面にも博士の寄與に俟つ所多大なりしは勿論、更に廣く史的趣

味の増進普及に意を注がれ、「西洋史新話」の諸篇西洋史話の如き好著を以て世の讀書子を裨益せられしは一般に周知の事たるべし。現代の時局に關する史的考察は博士の平常特に留意せられし所に於て、かの「史眼に映ずる世界大戰」の一書は該方面に於ける近時の業績を輯録せるものなり。別に博士が過去に於て發表せられたる特筆すべき研究論文、興味深き卓説を撰集せる「南亭史話集」の公刊あり、著者の學識の一斑を窺ふに足るべきものならん。最近「世界大戰史」「佛蘭西大革命史」の二大著相次いで出て江湖の歡迎を受け、西洋史界の寂寞を破るや、吾人密に博士の益健在なるを慶びつゝありしに、今や突如として易簣す、嘆すべき哉。病危篤の趣天聽に達し、特旨を以て從三位勳二等に叙し瑞寶章を授けらる齡五十八。

●京都帝國大學史學科卒業生

京都帝國大學文學部史學科本年度卒業生左の如し。

- 桑原親通、鈴木登（以上國史專攻）、
- 丹羽正義（支那史專攻）、
- 横地得三（東洋史專攻）、
- 安藤俊雄（西洋史專攻）、
- 淺若 晃（地理學專攻）、
- 藤田元春（同選科）

●京都帝國大學史學科講義題目の變更
 過日内田教授逝去の爲め本誌前號掲載の本學年講義題目中變更を生ぜしもの左の如し。

- | | | |
|-------------|---|-------|
| 國史概説（中世及近世） | 三 | 三浦 教授 |
| 幕末維新史 | 一 | 西田助教授 |
| 國史概説（古代） | 二 | 喜田 講師 |

●河内國府の石器時代遺蹟の發掘

河内國南河内郡國府村遺蹟の發掘事業は去る大正六年夏、京都帝國大學により始めて着手せられ、爾來鳥居龍藏、木山彦一、大串博士等數回の發掘を重ね、本年四月に至りて亦、東京帝國大學の小金井博士及び柴田常恵氏によりて發掘せられ、斯界に於ける各種の重大なる新發見ありしは人の知る處なるが更に今画、京都帝國大學は木山氏の好意に依り、去る八月十九日より廿九日まで再び同遺蹟の發掘を行ひ、濱田教授監督のもとに東北帝國大學の醫學博士長谷部言人氏専ら人骨の調査研究を擔當し、田澤金吾氏及び考古學教室より梅原、島田、榊原諸氏、これに参加せり。今次發掘せる地域は前數回のものに接續せる衣縫と稱する遺蹟の西北隅約十坪にして之を地域の關係上五區に分ちて繼續調査せり。

今發見せる主要なる遺物を述べれば人骨は七體を算し、その三體

は完全にして第二號人骨と稱するものには一邊約五寸、厚さ、二寸の三角形の平石を胸にして兩手を以て抱けるは從來これに類する發見ありしも斯く明瞭に之を示せるもの蓋しこれを以て嚙矢とすべし。第三號人骨の骨盤上中央には小金井博士發掘の時に見たるが如き塗朱せる環狀の兩突起ある小骨器を發見し、同じく頭蓋の右耳邊に於て瑛の朱塗せる土製耳飾を見たり。其他石器、土器類等に至りては前圖と大同小異なるも、只磨製石斧に類するもの及び貝塚土器の把手、繩紋土器の紋様に於て從來發見せられざりしものを見るに至れり。此等遺物遺蹟の研究調査報告は追つて同大學に於て發表せらるゝ筈なり。

●讀史會

例會 五月二十六日午後九時より今般長崎高等商業學校教授に榮轉せられし文學士川島元次郎君の送別をかれ學生集會場に於て例會を開く。出席者は三浦、喜田の二博士、中村、下川、清原、西田、富森、川島の諸學士及び桑原、鈴木、橋川、源、岩橋の諸君にして、左記の講演ありき。

一、楠木正儀

文學士 中村直勝君

先づ楠木正儀の生死年時及び官位より説き初むべしとて、楠木書の系圖によれば正成の子に二人の如く記載すれども、續群書類

從所收の系圖によれば正行と正儀との間に正時ありて兄弟三人となる、且正時に關する新發見の系圖あれば三人説大いに有力なり太平記には正儀を楠次郎左衛門丞といへども、金剛寺文書十一月九日左中弁奉の御教書には楠三郎屋形宛とあり、是に對する十二月二日附楠正儀の答書あり、以て正儀が三郎なるを知らるゝが故に、普通三郎は三男の意味なれば、正儀は正成の三男なるべし。次に正儀の年齢についていへば、正平七年男山合戦の時太平記には二十三歳とあれば、これによつて逆算すれば元徳二年の生誕となる。正平六年藤井寺の合戦の時正行二十三(太平記には二十五とす)正儀十九なればこの間に正時を挟み得べし。正儀はかくして元中七八年、六十一二歳を以て歿せしが如し。次に官位のことを述べ、康和三年參議に任ぜられしが、恐らくこの參議のまゝにて終りしならんと結び、花押に種々變遷のあることを述べ、正平四、五、六年に用ひし花押の間に多少の異同あり、而して金剛寺文書十一月八日の正儀自筆の文書は、新たに國史研究室に得たる十月十九日附の院宣と併せ見、その内容より批判して正平三年とすべきものなり。それより正行歿後の南朝方の狀況より、北朝に降りし事情經過を詳細に別出し、終に彼の一生は殆んど南北兩朝對立の全部を負しが如く、大日本史には彼の性格を叙して人と爲り遲重といへども、要するに職術家にして職團家にあらず、楠氏に同情

する。太平記の記事は多少割引して見るべきものとしても、彼が軍略家として雄雌に参すべき人なりしことは蔽ふべからず。これ父正成兄正行に似たりとせんも、又南朝の如く比較的少數の兵を以て、比較的多數の軍を擁する北朝に對抗せんが爲には、自ら軍略を主とすべきに非ざるか。彼の思慮深かりしことは察するに難からざるべく、その書風花押の筆勢より見るも、斷決力は或ひは弱かりしものありとすとも、温情ある人なりしことを想ふに足る云々。この時三浦博士は起つて川島君を差別するの辭を述べ、大いに惜別の感を深からしめらる。次で川島君の御挨拶ありて、喜田博士の講演に移る。

一、穰多について

文學博士 喜田貞吉君

從來穰多の史料といへば東京の彈左衛門により、それ以外他に餘り亘らざれども、上方は江戸と異なり、上方は穰多の根元なれば、むしろ上方より研究を始むべきなり。京都は穰多の水上といふは、その源流を示す語にして、穰多の古く見ゆるは師茂記貞治五年の條なりとす、されど黒川春持翁の指摘されし如く、塵袋には既に弘安年間の京都の穰多のことを記しキヨメを穰多といへば、掃除人足を穰多と呼びしこと明かなり。文安年間になり埃塵抄にも河原者を穰多といふは如何といふ條見ゆ、細工といふも穰多のことにして、細工をして祇園の鳥居を建つる穴を掘らしめしこと

あり。次にエトリといふは鷹司が屠者の群に没落せしに非ざるかと思はる。鷹司の御取は平安京の御取小路に住せしものなるべく貞觀三年鷹司の廢止となり、同十三年この地を以て葬送放牧の場所とせり。而して現在の石島村即ち古への石原小島の地は正にそれに當り、今日もなほ特殊部落なり。雍州府志に小島の穰多是穰多の初めといふも謂れなきにあらざるべし。かくの如く御取を以て鷹司に關係のあるものとせば御取が屠者の全部に非ざることも明かなり。次にエツタの語はエタよりも古かるべしとの推測により、エツタは樺太のオロツコ族が自らエツタと稱すると關係あるに非ざるか。オロツコ族はこれ史に見ゆる 肅慎韃靼にして久しく石器を使用せし民族なり。エツタの語が次第に擴充せらるゝに至り、御取屠者をもエツタと呼ぶに至りしならんか。

例會 六月二十五日午後七時より學生集會場に於て桑原鈴木兩君の卒業祝賀を兼ね開催、出席者内田、三浦、喜田の三博士、西田、魚澄、牧、辰馬、下川の諸學士及び橋川、源、岩橋、島田の諸君なり。例に依つて桑原、鈴木の兩君交々起つて卒業論文の梗概を發表せらる。

一、正徳の幣制改革及長崎新令に就いて

桑原 親連君

正徳の貨幣制度の改革は元祿寶永の悪貨を慶長の良幣に復せんとするものなるが故に、先づ慶長の幣制統一及貨幣制度を述べ、

次に元祿寶永の改鑄の原因とその影響を稽へ以て正徳の改革が眞にやむを得ざるに出てし所以を説き、白石の改貨を建言せしことより彼の改貨議を述べ、これを實施の結果とを比較し、更に白石の貨幣に對する意見及意見の基く所を原れてこれを論評し、併せて彼の經濟說と徂徠等のそれとを比較して貨幣策上に現はれたる兩者の意見の相違を明かにし、次に正徳改貨の實施が金融及物價に及ぼしたる影響を考察し、幣制と關聯して幕府の從來採り來れる貴金屬の流出防止策より正徳の長崎新令がこの點に於て如何なる注意を拂ひしか又その結果如何を攻究せり、云々。

一、徳川時代に於ける浪人の研究

鈴木登君

先づ徳川幕府の確立と社會組織の缺陷、幕府のこれに對する政策、浪人の性質と活動、浪人研究上の時代區分を述べ、慶長五年より承應の頃迄を第一期とし、その後明和の頃迄を第二期とし、その後慶應迄を第三期とせり、而してこれを前後兩期に分ち嘉永以前を前期としそれより慶應までを後期とせり。本論にては初に浪人の意義を述べ、上古、中古、近世に於ける浪人觀念の相異を擧げ、浪人發生の事情、浪人の生活、浪人の活動を叙して結論をなせり。その大體をいへば活動の二方面。一は時代に支配せらるる方面にして即ち初め武力的反抗をなし、第二期に文教的社會的活動となり、最後に國家的武力活動となりしこと、二は時代に影

響せざる方面にして生活に對する彼等の要求なり。(2)活動の原因。形式に於ては各活動は異れりと雖も、その根柢は彼等が生活狀態の恢復を計らんとするの考より發せりといひ得べし。(3)活動には中心點を要したりき。地位なく資力なく權威なきものなれば、有力なる中心を必要とせり、而してその中心となれるものは何れも當時社會組織の缺陷たる項目に求めたり、而して最後に皇室を中心として他の項目とも連絡をとりしため成功するを得たりと考察せらる。(4)幕府の浪人に對する政策と學者の意見。幕府に初は單に抑壓を以てまうしが慶安承應の變後漸く覺る所あり、その發生原因の一たる簽子法を改正し且大名取潰を減すると共に、一面には嚴重にこれを取締るの方策に出でたり。葦山と子平とは休職給の制度採用を主張し。徂徠は郷土制を主張し、春臺は浪土取締の役を設けその自尊心に訴へて暴學をなさざるを可とすとの意見を立てしが何れも採用せらるゝ所なかりき、宛も角幕府の對浪人策は先づ失敗に終りしといふも可なり、云々。右終つて審査の任に當られし内田教授の批評あり、續いて三浦博士喜田博士を初め會員相互の間に所懐を自由に談じ、一同歡を盡して十時散會せり。

●史學地理學同攻會夏期講習會

京都史學地理學同攻會は去八月四日より十二日に至る九日間京都家政女學校に於て「文化史上の京阪地方」を主題とし夏期講習會

九開催せり。講師及題目左の如し。

一 關人の見たる江戸時代の京阪地方 文學士 長 壽吉氏

一 文化史上より見たる京阪地方 文學博士 三浦 周行氏

一 近畿に於ける古代の工業 主幹 栗野 秀穂氏

一 近畿地方に於ける神社 文學博士 内藤虎次郎氏

一 平安時代に於ける職業的新階級 文學士 松本彦次郎氏

一 近世京都の西洋文明 文學博士 新村 出氏

一 近畿地方に於ける國寶特に寫經に就いて 文學士 萩野伸三郎氏

一 遺物遺蹟より見たる上代近畿 文學博士 濱田 耕作氏

一 平安朝に於ける京都の寺院と其人文的事業 文學士 西田直二郎氏

一 平安時代の建築 工學士 天沼 俊一氏

一 平安朝時代の宗教 文學士 蘭田 宗愚氏

一 古文書分布より見たる京阪地方 文學博士 黒板 勝美氏

一 京阪人の特性に就て 文學士 魚澄惣五郎氏

一 京都に現存する彫刻に就て 文學士 植田 壽藏氏

因に會期中八月五日午後より妙心寺及塔頭寺院へ七日午前より大

徳寺、北野神社へ、十日午前より、黄檗山、平等院、日野法界寺

醍醐寺へ史蹟踏査を催し隨時隨地講演をなし、九日午後より京都

帝室博物館を見學せり。

●西宮考古資料展覽會

豫報の如く西宮史談會にては去る六月八日、西宮神社々務所に於て第二面の同展覽會を開催せり。陳列品は石器時代、寫眞拓本類、郷土史料等の五部に別ち別に銅鐸十二個を出陳したりしが、出品總數一千六百餘點を越へたりと云ふ、就中河内國府發掘の遺物は其主要なるものにして本山彦一氏藏の骨と伴出せる耳飾、小金井博士發掘の際發見せる箕形土器、大串博士藏の國府發掘の骨、及現代日本人、アイヌの兩頭蓋と相對せしめたるは衆目を惹けり。古墳遺物としては武庫郡芦屋村發見の土製竈其他同郡より發見せるもの多し。寫眞拓本類は岩井武俊、田澤金吾兩氏のもの多く國府發掘遺物遺蹟寫眞及び高井田横穴の拓影等最とすべし。郷土史參考の兩部又見るべきものあり、尙銅鐸十二個を蒐集出陳せしめたるは蒐集の勞を多とすべし。同日は岩井氏の「高井田横穴に就て」と題する講演ありたりと云ふ、來會者は三百餘名、中に京都帝國大學教授文學博士内田銀藏、文學士古田良一、同辰馬悅藏、同大學助手島田貞彦、大阪醫科大學教授大串劔太郎、大阪毎日新聞社長本山彦一等の諸氏ありたり。

會報

●内田博士葬儀

本會創立者の一人なる文學博士内田銀藏氏の逝去に就き本會は香資を靈前に供し、又葬儀に際して評議員庶務擔任文學博士桑原聰成氏會員を代表して弔詞を捧げたり。

●編纂會

九月一日午後一時より文學部陳列館貸室に於て關催三浦評議員西田植村中村島田各委員出席十月號の編纂を終り、來年度の編纂豫定事項に就き協議したり。

●寄贈交換圖書

史學雜誌	三〇の七・八・九	史	學	會
歷史地理	三四の一・二三	日本歷史地理學會		
考古學雜誌	九の十一・十二・十の一	考	古	學
經濟論叢	九の一・二・三・四	京	部	法
國學院雜誌	廿五の七・八・九	國	學	院
飛騨史壇	四の十二・五の一	飛	騨	史
佛書研究	五四・五五・五六	佛	書	刊
六條學報	二一・二二	京	部	佛
尙	古	廣	島	尙
東洋哲學	七六	東	洋	大
伊豫史談	二六の八・九	伊	豫	史
算法圖理三台	一八	西	脇	濟

●會員動靜

入 會

東京市赤坂區青山南町六ノ三〇

徳富猪一郎

(右紹介者、渡邊世祐)

京都市上京區吉田町中大路三

天沼俊一

(右紹介者、藤原未治)

朝鮮慶尙南道馬山昌原郡慶

口石敬義

和歌山縣東牟婁郡新宮町

東 高 明

(右紹介者、三浦周行)

京都市府立第一中學校内

伏木誠義

(右紹介者、島田貞彦)

内田銀藏

死 亡

箕作元八